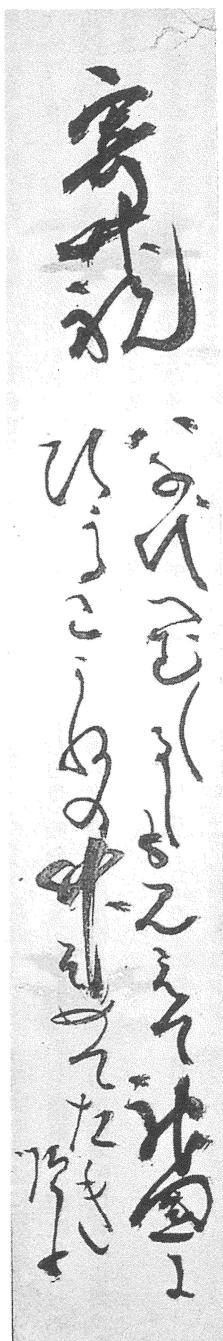
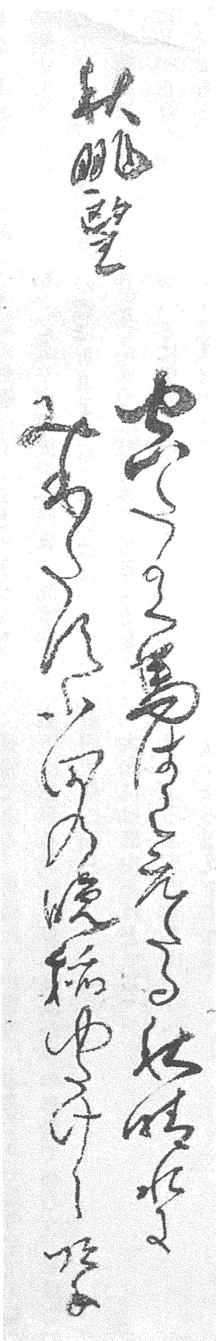


我も何^なけよと羽ばたきぞする
— 一富 順の短歌と書と —

烏 冬青



—

平成18年2月24日、電気電子工学科の小城左臣教授よりふとした機会に

『夏目漱石と祖母「一富 順」』（私家版 平成18年）と題する著書をいただいた。著者は小城教授の父君・小城左昌氏。

私はもとより短歌や書道には素養がなく、しかも専門は文学とは無縁の中国建築造園史である。だが、この本を読み進んでいくうちに澎湃としてわき上がって来る関心が私をとりこにした。著書巻末に掲載されている一富 順の二つの短冊が私の目を釘付けにした。

気韻あるのびやかな運筆と歌の気宇壮大さが順という歌人の存在を遺憾なく主張している。

「これだけの歌を詠み、書法を身につけた歌人ならば必ずや先学の研究があるはず」

との思いに憑かれて、先ず江下博彦氏の『漱石余情—おじゅんさま—』（西日本新聞社 昭和62年）を繰ってみた。歌人としての順への言及は一言もなかった。ついで原武 哲氏の浩瀚な研究書『夏目漱石と菅 虎雄—布衣禅情を樂しむ心友—』（教育出版センター 昭和58年）をひも解いた。鎌倉文人村の

創立者、一高の教授であり、漱石の金欄の友であり、能書家としても知られた菅 虎雄との交友関係、虎雄の妹としての順については緻密な考証とともに慎重な言及がたびたびあった。しかし短歌や書については一行の紹介もなかった。落胆した。

だが私のこの思いは言ってみれば「ないものねだり」の類ではないか。なんとすれば江下・原武両氏ともそもそもそこに関心がないのである。いずれにせよ、順の歌や書を江湖に知らしめたのは彼女の孫に当たる左昌氏が初めてであったといつてよい。左昌氏は同書の中で「順の書道と短歌の実力は田舎の女性としては、トップクラスのものであった。短歌は私の母が新聞を見ながら『今日も母のが載っている』と言って新聞を切り抜いていたことを覚えている。書道については、特に第3回目の上京の折、本格的な中国書道を身につけて帰国した兄虎雄の指導によって、更に一段と腕を磨いている。」(28頁)と言う。とすれば、順の遺留品のなかに、順の遺留品が姻戚である小城家にあると考えるのも僥倖に過ぎるのではあるが、あるいは明治36年南京三江師範(現南京大学)に清遊し、清の名筆家李瑞清に六朝の書法を学び帰国した兄・虎雄から贈られた漢籍等がないとも限らない。順は一富家に嫁して以来、書道、短歌、漢詩をよくした義父・虎吉の薫陶も受けていた。それにしてもいまだ三十路にはまだ間のある順である。書家として凱旋した虎雄の影響はすこぶる大きかったはずである。これは実に大きなテーマで、私などより書道史の専門家に託すべき課題である。ここでは「魁より始めよ」の諺に勇気ももらうほかはない。

6月18日、私は小城教授を介して福岡県三井郡大刀洗町富多の左昌氏宅を訪ねた。広い客間に並べられた順の短冊の夥しさに驚愕した。5尺の大物もあるが、ほとんどは短冊である。昭和28年6月の筑後地方の大水災で亡失したものの、他人の手に渡り散逸したものも少なくないと思われた。書籍はこれまた数多く残されていたが、小城家の蔵書と推測される漢学書がほとんどで、順所蔵のものは数点しか確認できなかった。ひとつは『四書講義全』(明治44年興元社)、もうひとつは『宋拓顔書李元清碑』。前者は順の所有署名、後者は虎雄からの贈り物であることが確認された。そのほか、一富家内の署名のある習字本があった。

雑誌は「女性」(プラトン社 大正13年9月号)と「婦人公論」(昭和19年2月号)を確認した。特に、「女性」は順の書道の研鑽を知る上で実に興味

深い。90頁にわたって薄墨による順の習字が限なく書き込まれている。左昌氏によると、久留米・吉井間に鉄道が開通すると、順は週に2回久留米の書道塾や短歌の勉強会に参加していたそうであるから、あらゆる機会、あらゆるものが精進の資になっていたのである。左昌氏は暇乞いする私に「順の書はカネになったと聞いております」と付け加えた。いささかの興奮に身を委ねながら、衷心大きく首肯する自分がいた。

二

次に順の短冊を紹介したい。残念である。作成の年代はほとんど確定できない。詞書があり確定出来るものもある。また私が判読に自信がないものもある。左昌氏によると、善導寺木塚の一富家の縁側に腰を下ろし、興のむくまま歌を詠む祖母・順の姿を見たというから、推敲前の短歌もあったはずである。事実、表現の違う同一歌が散見する。その比較考証は省略に従った。

あかねさす山田の里の豊かにも
けむりは登る御代の春かな

長幅である。御題に「田家朝」とあるから勉強会での競作である。耳納山系直下に拡がる筑後平野の長閑な春の早晨であろう。私はこの歌を詠するたびに舒明天皇の国見歌

大和には群山あれど

とりよろふ天の香具山

登り立ち国見をすれば

国原は煙立ち立つ

海原は鷗立ち立つ

うまし国ぞ蜻蛉島大和の国は

という万葉歌を想起する。順にはいくつかの天皇の御世を寿ぐ歌があつて、ほかならぬこの歌人の愛国の至情を垣間見ることが出来る。いつごろのことか、順は晩翠という号を用いた。むろん、残された短冊には順子の署名のほうが多い。

奉祝

高御坐あほげばいやに弥たかく
君のみい世は千代に栄えん

▽「高御坐」は天皇の位。皇位。

注連飾

年の立つ門辺を飾るみしめなは
いともめでたき君のよかな

▽「みしめなは」は御注連繩。

わが君の寿ぶき永く祈る民

今日はひとしく祝ひぬるかな

順が34歳のときに大正天皇が崩御した。順は「大正天皇御威徳」の詞書の下に次の歌を詠んだ。

神去りし御霊の鏡とこしえに

ひかりかがやく多まのみさゞぎ

▽「多ま」は霊。「みさゞぎ」は天皇の御陵。

確言は出来ないにしても明治末には晩翠なる号を得ていたかに思われる。

いざ祝へともいうたへよ五年の

我しきしまの道のさかへを

▽「しきしま」は日本国の異称。

寄竹祝

八千代へむしるしも見えて神国に

ひかるこがねの竹ぞめでたき

▽この歌は拙稿巻頭の左の短冊。

順の歌人としての眼は、日常の茶飯から一木一草、森羅万象に至るまで注が

れないものはなかった。ただひとつ相聞歌だけが見当たらない。愛や恋の歌がない。これは不思議である。前掲の順が習字に供した雑誌「女性」には、親交のあった芥川龍之介の「長江」という小説に並んで、炎の歌人・与謝野晶子の「短歌二十首」が寄せられている。因みに二首挙示する。

あるが中に恋の涙のわれもこう

黒みて赤き野のわれもこう

くれないのわれの涙の雫をば

宝とすなるわれもこうかな

女心の哀しさがわれもこうに託して嬌艶に詠い上げられている。順もかならずやこの歌を眼にしたに違いない。されど、それは順の歌風に何の影響をも与えなかった。想像の域を出ないが、順は、恋とか愛とかを自らのうちに封印してしまっていたのではないか。何故か。漱石の存在が順の心の中に秘匿された結果ではないかとの推断も一応成立する。しかしそれは速断に過ぎよう。『私は夏目さんが好きだとか、嫌いだとかでなく、とにかく結核が怖かった』と答えた（同書15頁）順の言葉に真実を解く鍵があるように思われる。

順は、愛国の歌人という言葉が一番相応しい。むろんここで言う愛国とは、軍国主義者などという言説の言いかえではない。熊本の菅 虎雄宅で漱石に会った明治29年、順18歳。やがて一富留次郎に嫁いだ明治32年、順21歳。日清戦争の勝利の余韻とともに、北清事件を機に日露関係が風雲急を告げ、旅順攻略、奉天会戦、日本海海戦と戦況が大きく開展した時代であった。大正3年の第1次世界大戦。順はそのころ長女・満子（育子）を小城左織（左臣）に縁付かせた。順41歳。大正8年のことであった。やがて満州事変、日華事変、大東亜戦争と、順の50代から60代半ばに至るまで戦争こそが常態であった。順の一生は戦争とともにあったのである。国のために出征した戦場の兵士の姿は一刻も脳裏を離れることはなかった。出征した四男・種夫、五男・菊間のことも片時も忘れることはなかったであろう。

大づつや小づつのおともうちたえて

あかつきの空にかちどきのこと

▽「大づつ」は大砲、「小づつ」は鉄砲。泥濘の中の行軍、そして会戦。火野葦平の『麦と兵隊』が浮かんでくる。

戦場月

戦のひまにまるねの草まくら

むすぶ夢にも月を見るかな

▽「まるね」は丸寝。

▽「月」はおそらく中秋の月であろう。

煙草

一本のたばこもゆくりくゆらすも

あはれ戦の庭のますらを

▽「ますらを」は益荒男。勇士。

「恩賜」の煙草が明日も知れぬ命に得心を吹き込む。それはそうなのだけども。

骨はをれ目はしひぬとも国の為め
つくせし人ぞたふとかりける

慰霊

国のため命をすてしものの婦の
たまなぐさめのまつりにぎはし

▽「もの婦」は武人。

左昌氏は、ビルマ中国国境拉孟で玉碎した四男・種夫の遺骨が帰ってきた20年4月、その時の様子を肉親ならではの筆致でこう書いた。

「遺骨は久留米市役所で久留米師団の合同葬のあと、各遺族に引き渡され、善導寺駅より地元の人々に迎えられ無言の帰宅をした。順は家で待っていた。涙ひとつ見せず、黙って白木の箱を仏壇に置いた。

(中略) 少なくとも外面的には何一つ動ずることは無かった。しかし内心は、順の一生で最も悲しみを感じた事件ではなかっただろうか。」(40頁)

前掲最後の歌はいつ詠われたか確証はない。一人の日本人としての順の真情

が遺憾なく吐露されている。この合同葬のときの作かもしれない。

散華するもののふこそ哀れである。哀れであるがゆえに彼らはますらおであり、英霊なのだ。その尊さに条件はない。

順が涙ひとつ見せなかったのは時代の運命を深く受け止めた順の覚悟があった。軽々の批判を許さない愛国の情があった。順は、それを端的に日本のみ光が世界を覆う「聖戦」(みいくさ)と言った。

後生のわれわれが歴史を裁く愚を冒さなければ幸いである。

三

順は目にするあらゆる対象を歌題に歌を詠んだ。否、順にとって詠むという行為はいわゆる歌人の主観が客体を整序するといった意味の歌づくりの行為ではない。また自らの情念の吐露でもない。

順にとって歌とは主客一致の中に生きとし生けるものへの共感と、在りて在ることの感動を表明する営為というべきものであったと思われる。それはまさにカミとカミを祭るものとの交通文学である(武田祐吉)。

万葉調の正統、色彩感覚豊かで、雄健で、生活の感動そのものを順は継承している。例外はあるが、自らの情念を直截に吐露したものはほとんどなく、古今調は意図的に忌避したと思われる。

鯉

ひろ前のみ池の水に影見えて
あなうつくしきひ鯉白こい

▽「ひろ前」とは神社の前庭、カミの御前。

緋鯉白鯉はそれだけで美しいのではない。カミとともにあり、カミに生かされてこそ美しいのだ。なんとうつくしきかな、この条理。

鴉

阿かつきの時を告げて庭へ鳥
私も何げよと羽たたきぞする

▽「阿かつき」は暁。「何げよ」は泣けよ。

わが子の遺骨にも涙をみせなかつた順、おそらく生涯涙を見せることはな

つたはずである。順とて木石にあらずひとの子ひとの親、悲嘆にくれる日がなかつたとは言い切れない。人生すべて因縁と悟っていても、カラスの一声に識らず落涙しそうにもなる。カラスにも心を通わす歌人・順がいる。私は、この歌に勝気な女性の、内に秘めた豊かな人間性を感じ得る。

順が人事を詠むことは稀である。ほとんどない。歌仲間でもあろうか、東原君のためにと題して

ことの葉のつどひに今日もいのりけり
やみつるきみをはやもいやせと

▽「ことの葉」は和歌、またはその仲間。
と歌う順。その恢復を祈るやさしさ、真摯さ。

盆会

はちすさく花の都をいでまして
みた満まつりの今日ぞうれしき

▽「はちす」は蓮。「みた満」は御霊。

盆会

たらちねのおやのみたまをこの夕べ
むかえまつるぞうれしかりける

▽「たらちね」は母にかかる枕詞。

何歳になつても盆のたびに実母を想う。順は母がここに在りますがごとくうれしいのである。

御霊がうれしいのか、はたまた順がうれしいのか。ともにうれしいのである。主客一如の境地。

以下季節順に作品を並べてみよう。

初詣

朝ぼらけ初詣するひろ前の
すず乃音せはし年のはじめに

余寒

春あさしさえかへりたるこの夕べ
霜おく庭に氷る月影

余寒月

老の日の春のみまちであるものを
またさえかへる月の影かな

梅が枝になきてう都ろふうぐひすの
はねしろたへにあわ雪ぞ婦る

▽「う都ろふ」は移ろふ。「婦る」は降る。
これはめずらしい。万葉集歌である。

何か手本があつて順は臨書でもしたのか。いずれにしても順の古典に対する不断の研鑽がしのばれる。順の短冊の中にはこの種の歌が混じっている可能性がないとはいえない。その検証は他日を期したい。

老松

杖つきてあわれに見ゆる老松も
はるたつ今日やみどり婦かめむ

▽「婦かめむ」は深めむ。

霞

野も山もたちながくしそ春霞
花見にゆかむ道まよふなり

▽「花」は桜花。

初夏藤

春かれて夏にかかれる藤波の
こきむらさきの花のよろしも

▽「藤波」は藤に花が風で波のように揺れ動くこと。

川辺山吹

駒洗ふ川辺の岸の夕霧に
ぬれてきたる山吹の花

花菖蒲

我やどの垣根におふる花あやめ
朝夕霧ぞにほひふかむる
▽「霧」は、きり。もや。

梅雨近

古のころはねやの戸しめる心地して
み空に近くみゆるさみ多れ
▽「さみ多れ」は五月雨。

朝雲雀

八重がすみたなびく野への朝ぼらけ
すがたかくしてなく雲雀かな

風前蚩

川風にふきおくられて涼しくも
と婦やはたるはうれしがるらん
▽「と婦や」は飛ぶや。

山上雲

朝ぼらけ山にたなびくしら雲の
立のぼりて遠さかりゆく

山上雲

山の端のあなたの空にたつ雲は
さそふ嵐に雨とふるらん

松下納涼

草の葉に吹くとみえて松かぜも
木の下さらぬかぜの涼しさ

海上霧

海原にほのぼの見ゆるとも舟や
けさたつきのたえまなるらん
▽「とも舟」は連れ立って行く舟。

海辺避暑

島山の小松がもとにうちよする
なみの音きゝてあつさ忘れし
▽「島山」は全体が山になった島。

海辺避暑

なつしらぬ由井の濱べの夕ぐれは
秋の風ふくこゝちこそすれ
▽「由井ヶ濱」は由比ヶ浜。

鎌倉市

鎌倉市の相模湾に面する海岸で、兄の昔 虎雄が住んでいた。とするところの
前掲3首は順が上京した折、鎌倉を訪れたときの歌であるう。

残暑

空たかきけしきは秋になりぬれど
のこる阿つさのたへぬころかな
▽「阿つさ」は暑さ。

軒雀

夕ざれはわら屋の軒にさわぎつゝ
ねぐら争ふ村雀かな
▽「ゆうざれ」は薄暮。

軒雀

軒になくこゑに朝いの夢さめて
おきたとさわぐ村雀かな

▽「朝い」は朝寝のこと。順の古典的素養の深さには舌を巻く。

古寺夜葉

すみぞめの袖にもみじのちりかひて
阿やにしきともみねの古寺

▽「すみぞめの袖」は僧衣や喪服を指す。「阿やにしき」は彩錦。
順は法要で菩提寺を訪れたのであろう。

眺望

空たかく馬はこえたる秋晴れに
みわたす小田の晩稲ゆたけし

▽この歌は、拙稿巻頭の右の短冊。

月夜虫

月てりて小萩がもとなく虫の
こゑもすみぬる秋の夜半かな

▽「すみぬる」は澄みぬる。

行路蒲

旅人のゆきかふ道の花すゝき
したふまれてもまねく夕ぐれ

▽「花すゝき」は尾花。

山家残菊

谷ふかし霜にたへてもさく菊は
山がつならで知る人もなし

▽「山がつ」は山賤。きこりや袖人を指す。

社頭楠

千代八千代生ひしげるらん大前の
い垣の楠は神のまにまに

▽「い垣」は齋垣。神社などに巡らした垣。

社頭松

をさゝ山みどりも婦かき松が枝は
千世経む色ぞかねて見えける

▽「をさゝ山」は小笹山か。「婦かき」は深き。

社頭松

もみちせぬときはの松に婦く風の
笛のねにきく神のみやしる

▽「婦く風」は吹く風。

社頭松

もみちせぬときはの森の松風を
笛のねにきく神の広まえ

峰松

みねたかく五百枝にしげる老松は
幾世へぬらむすがたをゝしも

▽「五百枝」は「いおえ」と読む。枝が茂る様をいう。
順はときにカミとも交流する。松風に流れてくる笛の音を聞きつつ、巫女の

ごとく御霊やカミの声を聞くのである。「天地一虚舟」の境地である。松は、
この国においては古来カミの依代であった。

猿

聞きたびにうさやましららの声ならん
人はかけせぬ峰の松の戸

▽「ましら」は猿。

冬月

冬がれのもりのくち葉にてる月の
かげさへ氷る夜半のさむけさ

昭和45年、順は92歳で他界した。

おそらく筆を執り、歌を詠むといった宮為は死ぬ直前まで続いたものと思われる。私の手許には昭和42年、順88歳のときの短冊がある。5月12日、順の誕生日の日の歌である。この短冊には「州子頂く」の鉛筆による書き込みがある。米寿の祝宴で同宿していた順の孫の州子に与えたものであろう。

十五やの月をかくせし松の枝
きりたくもありきり多くもなし

▽「きり多くもなし」は切りたくもなし。

これが辞世の歌だという根拠はないが、後数年しか残されていないことを思えば、晩年の歌であることは確かである。ただ、ここに順の短歌観を見て取ることは可能であろう。

順にとって松のない月は空虚であるし、月のない松も野蛮であった。月と松は背反しながらも相即し、ひとつの調和の世界を生み出す要素なのだ。そこにこそ順の歌の存在根拠があったと思われる。

順は70歳、古希のときに歌二首を詠んだ。昭和23年のことである。

むかしより稀なる年を過ぎにても

なほあきらめず思ふ百歳

古稀

古しより稀なるとしを過ぎにても

なほあきらめず思ふ百年

見られるとおり、これらの二首はわずかの違いである。しかし、私には歌意には大きな径庭あるように思われる。どちらが最終の短歌であるか定かでない。ただ、後の歌には「古稀」の詞書が添えられているのでこちらが終歌の可能性

が高い。一見、「あきらめず」「百歳」が「あきらめず」「百年」に変更されているに過ぎない。しかし、「あきらめず」は意志力であるのに対して「あきらめず」は持続してきた生の享受である。「百歳」はわが生の執着であるのに対して「百年」は時の流れである。順は歌う主体である歌人から歌われる客体としての歌の中に自我を没却している。生きるという「思う」主体は依然あるにはあるが、それに拘泥する自分はいない。享年92歳は順にとっては不足にも満足にも当たらず、自然(じねん)そのものであったと思われる。

順には数こそ少ないが、俳句もある。

養老の二字に長寿の祈念かな

自らの長寿を祈念したものではないであろう。祝長寿と題した

天盃を又も頂く齢かな

の句には大正乙丑五月十日 一富晚翠の署名がある。乙丑といえは大正14年、順47歳の年のことである。誰かの祝いの席での句であろう。私は未見であるが左昌氏によれば、

大君のめぐみに潤ふ屠蘇の酔ひ

というのもあるそうである。いずれも晩翠の署名がある。

四

最後に、順の書の品格に決定的影響を与えたと思われる兄・普 虎雄の書について少しく紹介しておきたい。もとよりこれは私の力量の及ばないテーマであるから、虎雄の書を参考に掲げて比較の資に供するのみである。しかも書簡であるからそれだけで書法を云々するには自から限界もあるう。

私が小城家で確認した虎雄の書簡は、ひとつ目は順の長女・育子(満子)が小城左織(左臣)に嫁いだ直後、大正9年4月の左並宛のもの、二つ目は大正12年間東大震災直後の10月、震災の様子を仔細に報告した育子宛のもの、これは虎雄に対する育子の見舞いへの返事。三つ目は胆のう炎を患った虎雄が見舞いをした左織(左臣)、育子に返事した昭和2年10月のもの、わずかにこの3通のみである。肝心の順と虎雄との往復書簡は小城家には一通も存在し

ないのであろうか。順は一富家の人間であるから、それは当然といえば当然である。仮に一富家に残されていたとしても左昌氏の指摘のごとく昭和28年の大水災によって烏有に帰した可能性が高い。あるいは虎雄、順兄妹間の往復書簡には漱石に関する内容も少なくな、ために漱石の書簡とともに焼棄したのかも知れない。かえすがえす惜しまれる。

明治45年、順が34歳ごろのことである。夏目漱石が中国湖北省沙市の日本領事館・橋口 貢に宛てた書簡がある。その中に言う。

此間菅の家に行き大に書道を承り近刻の何紹基其他の書を見せられ候

清人何紹基杯の書のうま味は小生には分かりかね候菅はそれを情けないと申候

小生は清人の書は猶清人の詩の如く気格頗る下ると吹いて置き候（漱石全集第十五巻152頁）

南京から帰国してすでに7年、元来書に関して漱石を一目置く虎雄であったが、この漱石の口吻からすれば、虎雄は、何紹基の書が分からない漱石をなじるほどに力をつけていたことが知られる。「吹いて置き候」と嘯く漱石自身、虎雄の実力を認めた反証といえなくもない。書家としての天与の才が今まさに開花しつつあった。虎雄の「我猫庵」の扁額は有名であるが、芥川龍之介なども虎雄の書をこよなく愛したといわれる。

私は来春この職場を辞する年齢に達した。南京にある大学に客員として渡華

することが決まった。その瞬間、虎雄の書法が李瑞清という師を得てどのように変化したのが、興味尽きないテーマのように思われ、順と虎雄との間の書をめぐる往復書簡が発見されない以上、書法から順の書に迫るしか道は残されていないのではと考えるようになった。虎雄が六朝の書法を会得した南京、その南京に私が奉職するとは偶然にしても偶然に過ぎる話ではないか。菅兄妹に「これはきみの宿題だ」といわれた気がしてならない。そう思うと、出立を前に少年のように希望に胸膨らませた自分がいることに気づくのである。

附記

小城左昌氏と小城左臣教授には、あらゆる機会に順に関する情報をいただいた。とくに左昌氏の、祖母・順を語る肉親しか知りえない逸話には深い感動を覚えた。小城教授は順の短冊をCDに収め研究の資を提供された。

また、写真処理に関しては電子情報工学科の宮崎出雲准教授の手を煩わした。短歌については書道家でもある同僚の後藤知恵子さんの意見を参考にした。併せて深甚の謝意を表したい。

(8・21)

(二〇〇七年九月二十八日 受理)

昔 虎雄の小城育子宛書簡

此見まゝに
 ありては
 ありては
 家がや
 大分
 しも火
 か
 ず
 ち
 多
 傷
 け
 除
 左

う
 歩
 た
 あ
 あ
 の
 の
 層
 き
 一
 目
 中
 中
 せ
 文
 大
 さ
 ど
 助
 の

立
 も
 大
 こ
 だ
 昔
 舊
 有
 建
 モ
 足
 お
 一
 虎
 一
 一